



録
北条九代記
七

伊予
3496
7



リ 5
349
7

鎌倉北條九代記卷第七

雷震 將軍家御退居問答勘例

同六月九日酉刻バカリニ黒雲打オホヒ俄カニ夕立降
出ツ、闇ヤモノトク成テ電光撃耀シ霹靂雷空ニ交リ
間ナク時ナク鳴ケルガ人民肝神ヲ失ウ所ニ御所ノ車
宿リ東ノ母屋ノ上ニ落カ、リ柱ハ碎ケテ破風公落タリ
後藤判官ガ下部一人コレニ打レテ死ケルヲ進ニシテ
士門ヨリ出シケリ同十四日相模守時房武藏守泰時
下ニレタリ隱岐入道行西駿河前司義村民部大夫入
道行然加賀守康俊彈正忠季氏等候レテ西ノ廊ニ會
セラレ去ヌル九日ノ雷震ノ事ニヨリテ觸穢アルベキ故將
軍家御所ヲ避シメ給スベキ故御占ニ付テ生口凶ニ委サル



ベキノ^由評議ニ及ビケリ。季氏申サレケルハ先規分明ナ
ラス兆^{のウツカタ}ノ吉凶ニ^百ルベキカ醍醐天皇ノ御宇延喜八年六月
二十六日清涼殿ノ坤ノ方ノ柱ノ上ニ霹靂ニレ大納言清實
卿右中辨希世朝臣忽チニ雷火ニ依テ薨セラル天子ハ常
寧殿ニ入御^{シテ}スストイ^トモ觸穢ノ沙汰ハゴレテ^レト隱岐
入道申サレレハ延喜ノ例ハ不吉ナリ同八月三日御位ヲ
隱居給ヒ同九月二十九日ニ御事^ニシ^レセリ況ヤ常寧殿ニ
入御アリ^レ上ハ遷幸ト申スベ^レト義村申サレケルハ右大將
家奥州ノ泰衡ヲ攻ラレ^レ時御陣中ニ雷落タリ承久ノ
兵乱ノ時右京兆義時ノ寵ノ上ニ雷落タル皆是吉事ナリ
惟異觸穢ノ義ニ^アラスト康俊申ケルハ先例ハ^ニラス御
占ノ上ニ^シテ御沙汰アルベキカト異議區^ニシ^テ一決セス

477
七人ノ陰陽師等ヲ^メシテ占ハセラル恭貞朝臣申ケルハ
落ルハ何方モ同ニ御所ヲ避ラレメ給ハニ^コトハ^カ候
ヲ^ハント晴賢申テ^イハク雷ノ落タル所ニ觸穢アリ居ベカ
ラス金匱經及ヒ初學記ニ^ニユ不快ノ所ハ避^レノ給^フニ^ア
リト重宗申テ^イハク京邊ニ雷ノ落タル所^ニ避給ヒ^シ
例ナ^レ此御所ニ限リテ其儀アルベカラスト師員カイ^ハク
後京極殿ハ將軍家ノ御先祖ナリ大炊殿ニ^オハ^シニケル
キ雷震アリ^レカトモ避^レメ給ハス彼御子孫當攝政ニ
テモ^イヨク御繁榮日^ニコ^レ新々ナリ頗ル佳例ナラ
スヤト晴賢難^シ申ケルハ御子孫ノ榮貴ハ左右ニ^ア
ハス但大炊殿ハ幾程モナク燒崩レテ今^ニ荒^ニツキ一
宇ノ御所モ^コレナ^レ其御身僅カニ三十八歳ニ^シテ御

頓滅アリ。最上人吉例ニアラサルカト。三浦義村此義ヲ
甘心ス。是非ニ付テ占ヒ申セト仰セ出サル。七人ノ内ニ
人ハ別事ナレト申ス。五人ハ御所ヲ去リ給フベキ由ラ
占サヒ申ス。多分ノ義ニ付テ。武州恭時ノ亭ニ入御アル
ベキニ定マリケリ。

夏雪 付 勘文 井北條修理亮時氏卒去

同十六日。美濃國ヨリ飛脚到來シテ申ケルハ。去ヌル九
日辰ノ刻ニ。當國時田莊ニ大雪降テ。一尺餘ニ及フト
イヘリ。武藏守恭時甚ハ夕畏レシメ給フ。武藏國金子卿ニ
テモ。此日雪マヅリニ雨フリテ。後ニ雹ノ降ケレバ。是ニ打
レテ鳥獸オホク死セシト注シ申ス。凡ソ六月中。雨更ニ
ズリヤム日ナレ。水無月ノ降雨ハ豊年ノ兆トハイヘドモ。

痛

涼氣ソノ法ニ過タリ。夏熱カルヘクシテ却テ寒涼ナルハ
秋疫疠行ハルトゾイフナル。此行末イヨクオホツカナ
シ五穀モ定メテ登ラサシカ。風雨違節則歲必飢荒ス
ト書典ニモミエタリ。只事ニアラス。関東ノ政務私アル歎
善ラ賞シ惡ラ誠シメ身ヲ忘レテ世ヲ救フ心サシ。此中
ニモ誤リ有ラン。陰陽ノ氣運正シカラス。天道ノ咎何
事ゾ。泰時一人カ身ニ負テ。万民ヲ助ケサセ給ヘト。漢ヲ
流シテ歎カレケリ。ソレ盛夏ノ節ニ雪ノフリケルコト。孝元
天皇二十九年六月ニ降雪アリ。推古天皇三十四年六
月ニ大雪アリ。醍醐天皇延喜八年六月ニ大雪アリテ
皆不吉ナリ。又當今ノ御宇ニアタツテ。今月九日ニ雪ス
リタリ。イツレモ帝世ニ大オイクニ十六代ヲヘタツ上古

修
傷

ノ時スラ不吉ナリ。増テ末世ノ今九夏ノ天ニ雪ノアル
コト。イカサ、宜シカル。ト思ハヌ人モナカリケリ。泰時
ノ嫡子修理亮時氏ハ去ヌル貞應三年六月二相模守
時房ノ長男掃部助時盛ト同時ニ京都六波羅ニ上洛
セシメ。洛中ノ成敗ヲオコサハレ。兩人ナガラ父ニ替リテ政
務ヲイタシケル所ニ病氣ニ依テ鎌倉ニ歸ラレ。泰時ノ舍
弟駿河守重時其替リニ上洛セシム。時氏イヨク病惱
オモクシテ。六月十八日ニ卒去アリ。次男時實ハ去ヌ
ル嘉祿二年六月ニ卒ス。四五カ年ノ間ニ泰時スズニ二
人ノ息ヲ失ナレ給フ。愁歎ノ色深ク。腸ヲ断給フトイフ
モ。カオヨバサルコトナレハ。時氏ノ尸ヲ大慈寺ノ傍ナル
山ノ麓ニ送墓シ。中陰ノ佛事作善イト。願ニイタサレケリ。

降霜石降冬雷 將軍家御墓所御輿入

同七月十六日ニ霜ノ降コト冬ノ如シ。八月六日ニ日
中ヨリ雨アリイテ瀉スカヲクナリケハ洪水俄ニ漲
リテ河邊ノ居民家トモニ押流サレ溺死スル者數不知
古老ノ輩イダカハ洪水ハ例ヲモ聞及バストゾ申合ケ
ル。同八日ニ申ノ刻ヨリ大風吹出テ雨ニシテ夜
半ニ及フ。草木ノ葉ハ枯落テ冬ノ氣ノ如ク。五穀損亡ニ
テ萎伏タリ。九月八日ノ申ノ刻ヨリ寅ノ時ニイタルニテ
少ノ休時モナク。大風吹オヨリ御所中ヲ初メテ諸寺諸
社ノ鳥居寶殿武家民屋ユトクク破損顛倒ス。只事
トモ思ハレス。陸奥國芝田郡ニハ石ノ降コト雨ノ如ク。其大
サハ柚栂ノ勢ニテ細ク長シ。下道二十餘里ノ間ニ馬ノ鳥

類打ル者数ラス。又十一月十八日ニ鎌倉ノアツリ風
雨頻リニシテ申ノ刻ヨリ夜ニイタリ大風大雨大雷
ニ諸人魂ヲ惱メセリ冬至ノ日ニ雷鳴ゴトハ希代ノ變異
ナリ。十二月五日ニ客星西ニ現ユコレラノ災變只ゴトナ
ラズ飢饉疾疫兵乱ノ瑞兆ナリト。京都鎌倉共ニ申ケレバ
カタク御慎ニ深クサレノ御祈禱アリ。今年將軍家
十三歳御嫁娶ノ事御沙汰アリ。故將軍頼家公ノ御娘
竹御所トテ有シケル御年二十八ニナラセ給フヲ將軍頼
經公ノ御臺所ト定メラル。十二月九日今日吉日也早卒
ノ密儀ナレバ御輿ニスサレテ小町口ヨリ入奉ル。式部
大夫政村大炊助有時以下布衣ニテ馬ニ乗タリ相模
守時房武藏守泰時ハ狩衣ニテ供奉セラル物静ナル御

後ハラスメテタカリケル御事ナリ。

天變地天御祈禱

去年ノ夏ノ比ヨリ天變打ツキケレバ武藏守泰時深ク
痛ニ思ハレテ御祈ヲノタメ諸寺ノ驗者ニ仰セテ五壇ノ
法一字金輪鳥瑟差摩明王ノ祕法ヲソ行セラレケル諸國
ノ國分寺ニシテ最勝王經ヲ轉讀スヘキヨ。京都ヨリ宣
下アリ民部大夫入道行然ヲ奉行トシテ關東ノ分國ニ
施行セラル承久兵乱ノ後諸國郡郷莊園新補ノ地頭ラ
所務ノ事先諸國ノ守護人ハ大犯ニケ條ノ外ハ過分ノ
沙汰ヲイタスベカラス守護地頭ニ付テ領家ノ訴訟コレ
アルトキ六波羅ノ召ニ應セザルノヨクニケ度ハ優恕スベシ
相觸コトニケ度ニ及バ仰セ付ラルベシ次ニ竊盜ノ事錢

上卷ノ代已 卷ニ 五

百文ヨリ以下ノ小犯ハ一倍ヲモツテ償スレ。百文以上ハ
重科ナリ。其身ヲ捕メ捕テ禁ムベシ。妻子親類所從ノ
トモカラ。同心セザルモノハ煩ハスベカラス。本ノコトク居住セ
シムベシ。洛中諸社ノ神事祭礼ニマセテ非職凡下ノ輩武
勇ヲ好ム奈尤トモ停止スベシトナリ。又此間炎旱煩
ニシテ疫疠諸國ニ流行ス。コレニ依テ天下太平國家豊稔
ノ多鶴カ岡八幡宮ニシテ二十口ノ學僧ヲモツテ大般若
經ヲ讀誦セシス。カサ子テ十ケ日ノ問答講ヲ修セラレケ
ル。五月中旬ヨリ南風吹テ日夜ニ小休ナシ。コレニ依テ由
比ノ浦鳥居ノ前ニマセテ風伯祭行ナシ。法橋圓尔ソノ祭
文ヲ書進ス。關東ニコノ祭ノ例ナシトイハトモ京都ニ行ナ
レシカバ將軍家御使ヲモツテ武藏守ニ仰セ付ラレ。大膳京

恭貞奉行ス。ユノ効驗ニヤ。六月十七日南風漸ク静リケリ。

名越邊狼藉 付平二郎左衛門尉諫卷時

同二十七日名越邊俄ニ騷動ス。越後守時盛ノ第二敵
打入タリト風聞ス。武藏守泰時ハ評定ノ座ニオシケルガ
直ニハセ向ハル。相摸守時房以下出仕ノ輩追々ニ行ケルバ
オリフシ。越後守ハ佗行ニテ留主ノ待下合テ悪黨兩三
人ヲカモトリタリ。其外ノ奴原ハ或ハ自害シ。或ハ打殺サ
レテ事静マリケリ。平二郎左衛門尉盛綱申ケルヤウ。武藏
守泰時御自分ニシテハ重職ニ居給フ御身ナリ。後年ヒ
國敵ナバトテ先御使ヲ以テ左右ヲ聞シメサレテ盛綱
ヲ以テハハシレ御使ヲモアルベキコトソカニ率余ニムカヒ
給フコソ不覺ト存知候多へ向後トテモ若輕忽ノ御振

舞ニテハ乱世ノ世ノ誹ノ夕子ナルベキカトソ諫メケル。恭
時申サレシハ人ノ世ニアルコトハ親類ヲ思フカ故ナリ。眼
前ニ兄弟ヲ害セラレシハ人ノ笑ヒヲ招クニアラスヤ。重
藏ノ詮カカラシモノカ。武道ハ人ノ身ニヨルベカラス。越後守只
今敵ニ闘マルヨリ聞候。佗人ハ定メテ少事ト思ハルベシ。泰
時ニシテハ建曆承久ノ大敵ニ違ハズト存スル所ナリ。聞
コトナキノ親者モソノ親タルコトヲ失サフコト母トイヘリ。
業隸篇ニハスヤ。兄弟鬩干墻外禦其侮トアリ。此大事
ヲ聞ナガラ急ニセスレテ子細ヲ聞届ケハ其間ニイカニ
ルベキ。井ヲ掘テ渴ラスクヒ。舟ヲ作りテ溺レタルヲ助ルカ
ズレシ何ノ用ニカ立ヘキトソ宣ヒケル。盛綱理ニ伏シテ面
ヲタシテ敬屈ス。駿河前司義村傍モニテ承ハリ感候ヲ

垂

ノ流サレケル。越後守此事ヲ聞テ。弥峯時ニ歸伏シ。潜カ
ニ誓狀ヲ下イラセテ。子孫ノ末ニテ武州ノ流ニ對シテ。无ニ
忠節ヲ存スベシ。逆心ノ企アルベカラスト。涙ト共ニ書進セラル
鎌倉失火

同十月二十五日晚景ニ及ビテ。大風南ヨリ吹出タリ。相
摸守時房ノ公文所ヨリ火出テ。戌ノ刻ハカリ風イヨク
ハシタナク。熾リニ扇ギケルホトニ。東ハ勝長壽院ノ橋ノ水
ナリ。西ハ永福寺ノ惣門ノ内ニイタルニ。燄飛煙散テ吹
テ。ヨフ煙ニ咽ビ人畜ノ焼死スルコト。救フニラス。右大將家
右京兆ノ法華堂并二本尊等。一時ニ灰燼トナリニケリ。
同二十七日評定所ニシテ。式部大夫入道光西相摸大
掾業時執シ申ケルハ。法華堂并二本尊ノ災ノコト。夕七理

運ノ火災タリトイフトモ。関東ニテハ慎ミ三畏シ思召
ベシ造營ノコト評定ヲ經ラルヘキカト。攝津守師員隱岐
入道行西。玄番允康連申ケルハ墳墓ノ堂ハ炎上ノ後ハ再
興ノ例ナレト。コレニ依テ只御助成有テ。寺家ニ仰せ付テ
ルベシト議定ス。五大尊ノ像ニテハ將軍家ノ御願トシテ
造立アルベシ。右大將家ノ法花堂ハ寺家ニ付セラレテ再興
アリ。

試貞永式目 付 関東飢饉

寛喜四年二月二十七日。將軍賴經公右近衛中將ニ補セラ
レ給フ。從二位ハ如元同四月二日改元アリテ。貞永ト号ス。
同五月ニ武藏守泰時。政道ヲ專ラニセラル。御成
敗ノ式條ヲ試三候ヘシト。日比内々御沙汰アリ。玄番允康

連ニ仰合セラレ。法橋圓全ヲ執筆トシテ。五十條ヲ定メラ
ル。同七月十日。政道ニ私ナキコトヲ表シテ。評定衆十一人
起請文連署シ。相摸守時房。武藏守泰時。猶此起請文ニ
判形ヲ居ラレタリ。今日ヨリ以後。訥論ノ是非。堅ク此法
ヲ守リテ。裁許セラルベキノヨリ。定メラル。コレスナチ古ヘ養
老ニ一年ニ淡海公ス。テニ律令ヲ撰セラレシ。コレニ准スベキ
モノカ。彼ハ海内ノ龜鏡。コレハ関東ノ鴻寶ナリ。今ニ及ビ
テ天下國家ノ政務。コノ式目ニ隨フトキハ。上ニ奉行頭
人ノ私曲ナク。下ニ論訥怨愁ノ入ナシ。仁讓廉義ノ軌範。
國家安泰ノ寶典ナリ。然ルニ去年今歳。イカナル氣運ニ
アタリヌラン。打必キ大雨大風大地震洪水旱魃火難
疫疠アラユル天災地妖アリ。此御祈リノタメ。大法祕法ヲ

オヨナハルニ止時ナシ。今年ハ猶飢饉災ノオシリテ。米穀
湧貴ニ柴薪高直ニシテ。粟ハ玉ヲ炊キ薪ハ桂ヲ焼クイフ
世ニナリテ。人民百姓等困窮スルコト。イフハカリナシ。親ニ
ハナレ子ヲ販テモ。朝夕ノ烟竈ニタエ。飲食ノ便リ居テガラ
失ナラテ。旅館ノ巷ニ袖ヲ日ケ。高貴ノ門ニ食ヲ乞テモ。
以井ニ溝瀆ニ行倒レテ。餓死スルモノ。道路ニニテリ。武藏
守此アリサテ。間給ヒテ。胸ヲ痛ニ肝ヲ爛ラカシ。貧弊
飢凍ノ民ヲ救ハントテ。矢田六郎左衛門尉ニ仰セテ。八木
九千餘斛ヲ借賑ハサル。當年ノ辨償力ナク。シクハ來年
ノ糶返ヲ待給フヘキヨシ。仰セ出サレケリ。美濃國高城西
郡大久礼ヨリ。上千餘町ノ納貢ヲ停メ。元生返ノ流浪
人等ニ。粥ヲ煮テ賑ハシ。縁者ヲ尋テ。行帰モノニ。ハ行

程ノ自數ヲ勘カテ。旅ノ糧米ヲアタヘテ。止任スベト申
スモ。其所ノ莊園ニ。預ケ置給フ。故ニ貧孤ノ愁ヘ。スコシ
ハ扶テラシ奉リテ。ヨロコブコト限リナシ。
下河邊行秀法師。渡禰陀洛山。付惠尊法師
貞永二年五月ノ末。紀州糸織我莊ヨリ。一封ノ書ヲ武藏守
泰時ニ奉ル。スオムチ。將軍家ノ御前ニ持參シテ。周防前司
親實ニ讀シメラル。昔右大將賴朝卿。下野國那須野ノ御
狩ノ時。大鹿一頭。勢子ノ内ニ蒐下ル。賴朝卿御覽セラレ
テ。トニ勝レタル。射手ヲ撰ハレ。下河邊六郎行秀ニ仰付ラ
レタリ。行秀嚴命ヲ蒙アリ。馳向ウテ。矢ヲ放シ。鹿ニアタ
ラス。勢子ノ外ニ走リ出シ。小山左衛門尉朝政一矢ニテ
射留タリ。下河邊行秀ハ面目ヲ大ナシ。狩場ニシテ。善ヲ

七條ノ代目

九

切出家ニテ逐電ス。行方更ニ知人ナカリケルニ智定房
ト名ヲツキ暫ク山頭ニ籠リテ行ヒシカ。熊野ノ那智ノ
浦ヨリ舟ニ乗テ南海補陀洛山ニソ渡リケル屋形舟ニ
入テ後ニ外ヨリ屋形ノ戸ヲ釘ツケニシ。四方ニ窓モナシ。日
月ノ光リヲ見ルコトナク。燈火ヲカヌカニシ。食物ニハ栗栢クリカヤ榧ヒノキ
少ク命ヲ多クケ一心ニ法花經ヲ讀誦シ二十餘日ニシテ
到著ス岸ニ上リテ山ノ姿ヲ拜ニヌグルニ山徑危ク險ク
シテ岩谷幽邃ナリ。山ノ頂ニ池アリ。大河ヲ流シテ山ヲ
スリテ海ニ入ル池ノホトリニ石ノ天宮アリ。觀世音菩薩
遊行ノ所ナリ。願行滿タル人ハ直ニホサツテ拜ムトイヘリ。
智定房此山ニ五十餘日留マリテ御經ヲ白ニ奉リ。又舟
ニ取乘テ熊野ノ那智ニ歸リシ。同法ノ沙門ニ書ラマシ

テ。武藏守殿ニシテ仕タリ。在俗ノ時六弓馬ノ友ニシテ
候ヲヒシカ。智定房出家以後ノ事トモヲ眞ニ記テ奉リ
又哀レナリケル事トモオホカリケリ。後ニ行末ヲ尋子スルニ
更ニ又知人ナシ。古ニハ文徳天皇ノ御宇。齊衡二年ニ惠尊
法師トテ道行ノ上人。橋太后ノ仰セニ依テ入唐シテ五臺
山ニテ觀世音菩薩ノ像ヲ感得シ。四明山ヨリ日本ニ
歸朝セシ所ニ風ニハサレテ補陀洛山ニイタリタリ。子ヲ
出サントスルニ更ニ動カス怪ニシテ像ヲ舟ヨリ上タリケ
ル。舟ハ輕ラカニ出タリ。惠尊ハ觀音ノ像ヲ置テ歸リシ
コトヲ悲シニ海邊ニ庵リテ結ヒテ住居シテ。誦經奉事
ス。後ニ漸ク寺トナル。禪刹ノ名藍ナリ。智定房ハ重子
テ南海ヲ渡リテ。此山ニヤ行サヒケシ殊勝ノコトナリト

橋

高

ノ語ラレケル。

武藏守泰時鑿察付博奕禁止

同八月十八日ノ早朝ニ武藏守泰時ハ榎嶋ノ明神ニ奏
詣アリケル所ニ前濱ニ死人アリ。年比二十子リノ男ナ
リケルカ。刺殺サレタルモノナリケリ。泰時不便ノ事ニ思ハ
レ御神拜ヲサシオキテ直ニ御所ヘゾラレケル評定衆ヲ
メシテ沙汰ヲ經ラレ。御家人等ニ仰せテ武藏大路西濱
名越坂大倉横大路以下。諸方ノ白くヲ堅メサセ家々
ヲ捜シテ犯科人ヲソ求メラレケルカ。ル所ニ名越邊ニ或
男手ツカラ直垂ノ袖ニツギタル血ヲ洗ヒケルヲアヤシニテ
岩平左衛門尉此男ヲ搦メ捕テ。ラセズ。水火ノ搦
問ニ及ビシカハアリ。ニ白狀ヲイタシケル。今夜足人ノ

家ニ集マリ五六人博奕ニテ勝負ヲ争ヒ。酒ニ刺殺
ニテ捨候ソノ血ノ付タルヲ洗ヒタリケルニ運命ヲキテ。予
ハ候トソ申ケル。コレニ依テ牢獄ニ入ラシ。博奕停止ノ觸
ラソ行ハシケル。泰時ノ鑿察ハ神ニ通ジ給ヒケリト。ニ大
感嘆セラレケリ。ソレ博奕ノ弊ハ世モソテ大ナリトス。正直
庶讓ノ人トイヘトモ。忽チニ奸偽ノ者トナリ。武士ハ臆病
ナリ。僧侶ハ道德ヲ失フ。君子ノ誠ル所。小人ノ好令
ニ。貧困口論ノ根トナリ。盜賊放蕩ノ基タリ。國家政務
ノ邪魔トナルコト。是ニスキタルハナシトテ。強ク禁制セラ
レハ。理ノリトソ申合ケル。

泰時政務付奉行頭人行跡評議

武藏守泰時ハ仁慈有道ノ赤。世ニ高ク庶讓節義ノ本。

丑三ノ内ニ貯テ安國撫民ノ心サシテ晝夜朝暮ノツトメ
 ト之給ヘリ記録所ノ門ニ鐘ヲ鈞テ訥訟人ニ撞ニメ上ノ
 十五日ハ卯ノ刻ヨリ記録所ニ出ラレ午ノ刻ニ退去アリ
 下十五日ハ午ノ刻ヨリ出テ申ノ刻ニ歸ラレ鐘ノ声聞
 コレバ人ヲ出シテ訥訟人ヲメシ入テ直ニ訥ヲ聞テ書記
 二月毎ノ十日ト二十日晦日ト決斷ノ日ヲ定メ頭人評
 定衆ヲ集メテ理非ヲ決セラル其法ハ貞永ノ式目ノ下
 ニ欲深キヲ耻シメ庶直ナルニ親シニ給ヒ行有餘力則以
 學文トイフコトアリ奉行頭人評定衆モ訥訟人ナキモ
 二六少シノ學文ヲ勤メ給ヘトテ年々若キ人ニシテ
 コトサテ道義ヲスシメラレ常ニ又仰セラレケルヤウハ
 万卷ノ書ヲ讀學ストモ與時相應文ヲ知ラスハ口惜

カルヘシソノ云所一旦ハ義理ニ叶フニ似タル事アルモ時ニ
 相應セザランニ六智者トイフスカラス只古人ノ吐出セ
 ル陳言ヲ轉ルノミナリ國家ノ大用トナルヘカラスコレヨク
 嗜ムベシ人ヲ毀リ人ヲ譽ルコレニテ我心ノ機嫌ニ依
 テ一定シカタキコトニテ侍ベリ往昔ハ人ニテコレヲ嗜トス
 年ノ比三十歳ヨリ内ノ人ノ佗ヲ本ムルモ好トセス年老父
 ル人ノ佗ヲ毀ルモ聞ヨカラス若年ノ輩物知類ニテ我ハ
 賢ナリトイハヌハカリニ利口ヲ申サル其内心ニ黑白
 ヲモ弁マヘナキホトノ分別ナル誠ニ片腹痛キコトゾカニ
 老人ノ威儀々ニシクテ才智分別モアラント覺ユルニ人ヲ
 ソレリ名ヲ立ラルハ老氣ナキ行跡ノホトイトオカシカ
 ルヘシコレヲコトハ三十重欲慢心ノ中ヨリ生ズル小智ノ

態ナリサレハニヤ。小智ハ亡國ノ端邪智ハ害毒ノ根ト申
スコトノ候ナリ。増テ頭人奉行ナントハ假ニモ虚語ヲイ
スヘカラス。人ノ訥ヲ怒ルコトナカレ。怒則ハ民ソノ訥ヘキコト
ヲオソレテ訥ヘサル時ハ自然ニ國家ノ好悪ヲキカス。民ノ
歎キトナルコトオホカルベシ。咎アルヲモ怒ラス。シテ先理ヲ
以テ後ニ誠シメ親疎ニ付テ理非ヲ枉ルコトナカレ。オ
フニ付テ衆會アリトモ無道ノ辨舌者不義ノ利口人
愚癡ノ遁世者申樂ノ諂ヲ輩ヲ近付。戲言虚誕ニ及
フ時ハ自然ニ侈リ出ツ。非道盛ニナルモノナリ。ソノ賢ヲ
賢トシテ道義ヲ語レハ道ヲ知者ハイヨク服シテ。知
サルハ慕ヒオモキ。日比私曲ナルモ必シハ直ニナルコト
ニテ候。愚ニシテ佞奸ナルモノハ衆會ノ座ニシテモイラス。

事ヲ知サル故ニ只人ヲ苦ムメ推倒ス。コトノミヲ語リテ
理非ノ道義ヲカヘリニス。奉行頭人モコレヲ聞テハ利ニ
走り欲ニ陥リテ。ツ井ニハ民ノ愁トナリ候。コレヲノコトハ
隨分ニ嗜ムヘキニテ候ト申サレケレバ。當座ノ人ノ首ヲ
垂テオモク甘心ニ給ヒケリ。天福二年七月六日。家司ラ
ニ仰セテ。起請文ヲソメサレケル。奉行ノコト親疎ヲイハズ
貴賤ヲ論セス。オノノ正義ヲ存ジテ。沙汰ヲイダスヘキ
ノオモキ十七人ノ判形アリ。
御墓卒去付明石神子
將軍家ノ御墓所日比御心地。隣ニ給ヒレガ。七月二十
六日。御産所ヲ點シテ。相摸守時房ノ第二ウツリ給フ。ソ
ノ夜ノ子ノ刻ヨリ。御産ノ氣ツカセ給フ。廷尉定員鳴弦

御墓卒去付明石神子

鳴弦

ヲ催ス役人十員奉向ス隱婆イリテ御産ハ平安ナルベシ時刻ハ明日ニテ候スト申ス醫師陰陽師ツトヒテ御脉心ヨカラス御兆思ハシカラスト申スニ五ツテ手ヲ握リ足ヲ空ニナシイカノアランド騷キアヘリ鎌倉町ノスエニ明石ノ神子トテ祈リニ感應アリコレヲマセトテ召レタリ年ノハト六十アリナル古神子ニテ御産ノ事ヲ問シメラルニイカニモ平安ナルヨシヲ申スサラハ神オロシニテ祈リ奉ラントテ幣切並ヘ燈明挑ケ梓ノ弦打鳴目ヲ塞テ唱へ出タルコトヲ聞ニ敬テマウス東ノ方ニハ東方朔南ノ方々ニハ南方朔西ニ西方朔北ニ北方朔中方朔下方朔上方朔ヲオドロカレ奉ルトイヒタリケルニアラ拙ナノ事ヤ東方朔ハ一人ノ名ニテ太白星ノ化身ト云イフナ

降

レ方々ニ多キ方朔カナトテ相摸守エツホニ入給ヒシカハ座ニアリケル人々ニカクシキ中ニモオカシクテ笑ハレシニ此神子耻カシクヤ思ヒケン打ステ、帰リニケリソノ夜ノ寅ノ刻御産ハ有ケレトモ死胎ナリキ御墓所ハ身心ナラシ後ニハ夢中ノクニシテ辰ノ刻ハカリニツ井ニ卒ラセ給ヒケリ御年二十二歳トソ聞エシ力及バス送葬イトナシテ法花堂ノ山際ニ埋ニ奉リ中陰ノ御佛事ソ終ノ日ハ五十口ノ僧ヲ請ヒテ由比ノ浦ニシテ水陸ノ供養ヲゾ遂ラレタル殿中何トナク打ヒソマリテ物サヒシクソ覺エケル

六月ニ萩付將軍家御病瘡

去ヌル三月五日武藏守泰時ノ孫歳十一ニテ御所ニ

臣テ元服アリ。弥五郎經時トゾ名ツケル。是ハ修理亮時
 氏ノ嫡子ナリ。同八月朔日。小侍所別當ニ補セラル。同十二
 月二十一日。將軍賴經公正二位ニ叙セラレ。以前ニ任セラレ
 不ラ。權中納言ヲ辞退アリ。去年十一月五日。天福二年ヲ改
 メテ文曆ト号ス。文曆二年八月二日。又改元アリテ嘉禎ト
 号セラレ。此年ノ六月二閏ノアリケレ。六月。秋ノコト當來
 月ノ中ニイッテ用ヒラルヘキヤト。藤内判官定員ヲモツテ有
 職ノトモカラニ尋子ラル。河内ノ入道申サレケルハ義解令
 子トクナラハ。閏月ヲ用ヒラルヘキコト分明ナリ。古歌ニモ
 子ノ三ツカラニソカトハセヨト候。治承四年。建久八年。建
 保六年。三十閏月ヲ用ヒラレ候ト申サレシカハ。成例ノ多
 分ニツクヘシトテ。閏六月晦日ヲモツテ。秋ヲ定メラレケル同

十月八日。將軍家ヲ陸奥出羽按察使ニ任ジ。十一月十九
 日ニ從一位ニ叙セラレケリ。同十八日ヨリ。將軍家御不例
 御痘瘡出タラフ。コレニ依テ四角四境ノ神祭。其外諸方
 ノ神社佛寺ニ仰セテ御祈禱サレケリ。又大佛師康定
 ニ仰セテ。一夜ノ内ニ千躰藥師ノ像一尺六寸ヲ造立セシ
 メ。并ニ羅睺計都ノ二星ノ像本命星藥師ノ像ヲ造ラシ
 ム。羅睺星ノ像ハ面貌忿怒ノ相有テ。青牛ニ乘テ。左右ノ
 手ニ日月ヲ捧ケ。計都星ハ。コレモ面貌ハ忿怒強盛ノ相
 有テ。青龍ニ乘テ。左右ノ手ニ日月ヲサバケタマヘリ。陰
 陽師親職ニ仰セテ。二万六千ノ神祭ヲ修セシメラル。財
 寶ヲツタヒ誠信ヲ疑ヒテ。神佛ノ擁護ヲ祈誓アリケルニ
 丹誠ノ懇祈佛神ノ納受マシムケル故ニヤ。將軍家不日ニ

快然ニ給ヒ酒湯御引下シケリ。鎌倉中ノ貴賤万歳
ヲ唱ヘ相州武州コトニ喜悅ノ眉ヲゾヒラカレケル。
春日神木付奥福寺衆徒蜂起

同二十九日六波羅ノ飛脚到來ニテ申ケル。去ヌル廿四日
南都ノ衆徒春日ノ社ノ神木ヲ捧テ入洛スト聞エシカハ勅
定ニ依テ在京ノ武士等ヲ差向テ防ガセラル。木津河ノ邊ニ
行合テ春日ノ神人等ト拒ニ戰フ。神人等オホク疵ヲ蒙
フル。此訴ニ依テ藤氏ノ公家執柄公卿コトク門ヲ閉テ
泰内セス。其起リヲ尋ヌルニ石清水八幡宮寺ト奥福寺ト
薪ノ御園大住兩莊ノ用水ノ相論ニ依テ鬪諍ニオヨフ。奥
福寺ノ神人等亦傷ニ罹リ死亡ノ者オホシ。南都ノ衆徒是
ヲ怒テ薪莊ニ押寄在家六十餘宇ヲ焼キ拂フ。石清水ノ

神人俄ニ神輿ヲ洛中ニ振奉ラントス。勅定ヲモツテ石清
水ノ別當成清法印ニ仰セラレ。因幡國ヲ寄進セラル。コレニ
依テ石清水ノ神輿入洛ノ義ハ留マリヌ。自今以後モハ轉
ク神輿ヲ動シ奉テ非分ノ濫訴ヲイタスニシヒテハ別當
職ヲ改補セラルベキヨシ堅ク制禁セラレタリ。奥福寺ノ衆
徒等コレヲ聞テイヨク憤リヲスクニ。今此騷動ニオヨベリ。
此事公家ノ重事ナルヲモツテ。關東ニ仰セシメサル。後藤大
夫判官基綱行向ス。使ヲ神木ノ御座所ニツカハシ。衆徒
等ヲ宥メ申ケレハ問答往返ノ後ニ承服シテ。神木御座
座アリ。コレニ依テ殿下公卿以下藤氏ノ輩ヲ泰内ニ
給ヒケリ。南都ノ衆徒上ノ部ハニシテラク静ルニ似タリトイハ
レ。モ内證ヲカク公家ヲ恨ニ奉リ。嘉禎二年十月ニ又蜂

起シテ城廓ヲ構ヘテ楯籠リケリ。六波羅ヨリ使節ヲ以テ宥メラルレトモ耳ニモ聞ケズ。使者ヲ打殺シテ首ヲ手躑ノ門ニサラセナシト云ケレバ評定ヲ經テ騷動靜ヲニホトマテ大和國ニ守護人ヲ据ラレ衆徒ノ知行莊園ヲ没收シテ地頭ニ補シ預ケラル畿内近國ノ御家人等ヲ催シテ南都ノ道ニ取切テ人ノ往還ヲ留メ印東ハ即佐原七郎以下武勇大カノ兵ヲツカハシ衆徒モ打テ敵對セハ更ニ優恕ノ思ヒヲイタサス悉ク打殺スベシト仰せ出サレ関東ヨリ計ラヒ上セラレケリ。カ、リケレハ城中兵糧ノ運送ニ難儀シテ僧綱以下皆トモニ城ヲ出テ寺ニ歸リ寺門ヲ閉テ佛事ヲ修ス衆徒ノ心宥マリテ靜謐スル上ハ公家武家トモニ惡ニ給フベキ事ナレ宜シク天

下ノ長久ヲ祈ルヘシトテ寺家ノ所領殘ラス返シ付テ大和國ノ守護地頭職ヲ留メラレケル。同十二月將軍家ヲ民部卿ニ任セラレ武藏守泰時ヲ左京權大夫ニ兼任セラル京都鎌倉靜謐スルコトヒトニ泰時ノ政務ニヨルト上下ノ諸人稱嘆セリ。

北條時頼元服付弓矢評論

嘉禎二年四月二十二日將軍家ステニ左京權大夫泰時ノ第二入御ニ給フ兼テヨリ此御料トシテ御所ヲ新造アリ檜皮葺棟門ヲツケテ内ノ躰金銀ヲ鏤メラルノミナラス御儲事毎過差ヲ盡サル御出ノ粧ヒ又殊ニ花ヲ飾リ給フ寢殿ノ南面ニテヒテ終日御酒宴アリ夜ニ入テ泰時ノ孫戒壽丸御前ニテヒテ元服ノ儀ヲ遂ラルコシハ

故修理亮時氏ノ二男ナリ。駿河前司義村理髮二候。將軍家加冠ニ給フ。北條五郎時頼トソ号セラレケル。同七月下旬ニ來月鶴力因八幡宮放生會ノ流鏑馬ノ議定アリ。五郎時頼初メテ射ラルヘキニ定メテ。鶴力因ノ馬場ニテ。舊テ稽古ノ事ヲ催シ。恭時ステニ流鏑馬屋ニ出給ヘハ。駿河前司以下ノ宿老叅集セラル海野左衛門尉幸氏ハ。舊勞ニテ故實堪能ノ射手ナリ。仰セニ依テ射藝ノ事ヲ計ラヒ申ス時頼殿ハ生得ノ堪能ソノ躰神妙ノ由ヲ感シ申ス但シ矢ヲ挾ムノ時ニ弓ヲ一文字ニ持給フ事。其説ナキニハアラス候多ヘトモ。故右大將家ノ御前ニシテ弓箭談議ノ時。一文字ニ弓ヲモツコト。諸人一同ノ義タリ。右ニ佐藤兵衛尉憲清入道西行法師申ケルハ弓ハ拳

ヨリ押立テ引ベキヤウニ持ヘシ流鏑馬ニ矢ヲ挾ムノ時。一文字ニモツク失礼ナリト候多ヒキ。一文字ニ持候ラハ弓ヲ挽躰聊力遅クモ工候。上ヲスユシ揚ラレ水走ニカケテ射タルソ然ルベケレト申サル。下河邊行平。工藤景光和田義盛望月重隆藤澤清親諏訪太郎。盛隆愛甲二郎。季隆等。手オモツテ甘心承伏シテ異義ニ及ハス。是計ハ五郎殿ニモ直サレ候ラハヤト申ケレバ。三浦義村打聞テ。コレニ此説ヲ聞テ候ヲ。只今ノ仰セニツケテ思ヒ出テ面白ク候トソ感セラレケル。恭時入與アリ。向後弓ヲ持様ハ此故實ヲ守ルベキナリトテ。此後種々弓箭ノ事。流鏑馬笠掛以下ノ作物ノ故實。的草鹿等ノ才覺大略淵源ヲ究メ。燭ヲトルホトニオク。退散セラレケリ。カクテ八月十

五日放生會ノ事。將軍家御參宮アリ。行粧頗ル嚴密ナリ。北條五郎時頼流鏑馬ノ射手ノ役メテタツ勤メラレシカバ。泰時ヲ初メテ貴賤感嘆ニ奉ル。

將軍御上洛并鎌倉御下向

嘉禎四年十一月二十二日曆仁元年ト改メラル。正月廿日將軍家御上洛ノ御門出トシテ。秋田城介義景カ甘繩ノ家ニ入御アリ。同二十八日酉ノ刻ニ鎌倉ヲ立給フ。同二月十六日ニ江州野路ノ驛ニツキ給フ。翌日子刻六波羅ニ著御アリ。路次ノ行粧美々敷コト目ヲオトロカス見物ナリ。諸國ノ武士我モくと召ニ應ジテ供奉セラル。其出立キニヤカニ行列乱ラス。静カニ打テソ通ラレケル。駿河前司義村先陣トシテ。家ノ子二十六人ヲ隨兵トス。

次ニ大河戸大須賀佐原三騎打並ヒ一番ヨリ十二番ニテ。テリテ打レタリ。將軍家ノ御隨兵百九十二騎。コレモ二騎打並ヒ各歩立三人ヲ具シテ。小林兄弟真壁ヲ先トシテ。六十四番静カニアマセ。其次ニ甲曹小具足引馬一足歩走ノ衆三十人。ソノ次ハ御乗替次ニ御輿御簾ヲ揚ラレ布衣ニ折鳥帽子ヲササレタリ。其跡ニ水子ノ人六番ニ分チ。コレモ二騎ソ打並ケル。第六番ハ左京權大夫泰時。隨兵二十人。侍十八人。ソノ跡ノ打籠ノ人数ハイコトトイフ數ヲラス。後陣ハ修理大夫時房。隨兵二十人。侍十人。其外打コミノ輩數ヲラス。濟々トシテ通ラレ。見物ノ諸人遠近ノ下モカラ野路ヨリ六波羅ニテ。道ノ兩方垣ノゴトク手ナクテ。幾千万トモ數ヲラス。同二十二日ニ將軍頼經

公先大相國ノ御亭ニ泰向シ。次ニ一條殿ヘ泰リ向フ先駟
ノ沙汰ニハ及ハサレドモ。行列ノ次第ハ定メラレ。先陣ハ右馬權
頭政村。次ニ將軍ハ大八葉ノ御車。大名十人直衣ニ劔ヲ帶
シテ。御車ノ左右ニ歩ヨリ供奉セラレ。次ニ衛府八人。次ニ四
番ノ騎馬ヲ打セ。次ニ扈從ノ殿上人。ソノ粧ヲ正シテ給フ。
同二十三日ハ頼經ハ公泰内アリ。夜ニ入テ小除目行ナシ。將
軍家權中納言ニ任シ。右衛門督ヲ兼セシメ。同二十六日ニ檢
非違使別當ニ補セラレ。二十八日ニ中納言ノ拜賀ヲ才ナハ
ル。二月七日權大納言ニ任セラレ。右衛門督檢非違使別當
ヲ辭シ給フ。四月七日大納言ノ拜賀アリ。同十八日ニ御辭
退。同二十五日一條殿御出家。御戒師ハ飯室ノ前大僧正良
快ナリ。五月十六日將軍家ヲ。右大臣良實ハ公泰ニ請セラレ。

御遊興限リナシ。福王公ト申スハ頼經公ノ御舎弟ニテ。一
條殿ノ御息ナリ。去ヌル四月十日。仁和寺御室ニ入室アリ。
ケルガ。今日右府ノ亭ヘイリ給ヒ。御遊半ニ福王公ノ劔給
フ。小鳥ノ籠ヨリ出テ庭前ノ欄ノ稍ニ留シ。公深ク惜
テセタマフ。將軍家ノ御供ニウライ上手アルベシ。死ルヤウ之此
小鳥射リテ。アラスヘトアリ。頼經公不ナケテ上野十
郎朝村ニ仰セ含メラル。朝村畏テ引目ノ自柱ヲツラ削リ
欠テサシサミ。樹ノ上ニ立ヨリケルガ。此ハ枝葉茂リテ。小
鳥ノ姿葉ノ下ニ不トシテ。諸人瞬モ止スレテ。木ノ上
所ニ朝村カチタテ立テ。立木アリテ。ツギニ矢ヲ大ツ小鳥ハ
轉ル声ヲトメ。矢ハ庭上ニ落タリケリ。朝村其矢ヲ取テ
奉ル。小鳥ハ引目ノ中人射リ。コメテテアリ。自柱ヲ削リ欠タ

ルハゴノ多ナリ。小鳥ヲ出シテ籠ニ入ラレニ并々チケル
 五ルコト。モナノコト。堂上堂下感ズル声暫ニ止サリ
 ケリ。將軍家御感ノアリ。御衣ヲ給ヘハ。右府ハ喜悅ニ
 夕ヘカ子給ヒテ。御劔ヲ下サレケル。六月五日。將軍家
 春日ニ社奉アリ。行列ノ躰嚴重ナリ。翌日六波羅ニ還
 御アリ。洛中警固ノ多。又辻々ニ簾ヲ焼ベキ。由。御家人
 等ニ支備サル。七月十六日。將軍家本座ノ宜旨ヲ蒙リ。又
 マフ。石清水賀茂祇園北野吉田等ニ御社奉アリ。此間ニ
 西國諸公事コトクク仰せ定メラレ。六波羅ノ守護ニ記シ
 渡サル。同九月九日寅ノ刻ニ太白星ハ太微ヲオカレ。災
 惑星ハ軒轅ヲ犯シ。月又歳星ヲ犯ス。流星アリテ色白ク
 赤シテトコト。数ヲシラス。同十三日今夜ノ明月殊ニ雲

モナク一天雲テ隈モナレ。古々ハ八月十五夜ノ月満シ
 賞シケルニ菅丞相今夜ノ月ヲ賞シ給ヒケルヨリ。今ニ傳
 ヘテ詠メアルコトニ定メラル。或殿上人ノ御モヨリ。右京權
 大夫泰時ノ御方ヘカクゾヨニテ。イラセラレケル。
 都ニテ今モ。又月影ニ昔ノ秋ヲウツシテゾミル。
 同十月十三日寅ノ刻ニ將軍家関東御下向前後ノ陣供
 奉ノ行粧行列ノ次第。御上洛ノ時ヨリモ。猶花ヤカニ出
 立テ。目ヲ驚カスバカリナリ。大相國禪閣ハ四ノ宮川原
 ニ。淺敷ヲウタセテ。御見物アリ。堀河大納言具實卿ハ大
 津ノ浦ニ車ヲ立ラル。其外卿相雲客ノ車ハ。所仕ノ隙モ
 ナレ。諸方ノ貴賤男女ハ面ヲオクベテ垣トシ。籠カ上ニ集
 ヒテ。コレヲ。京都ノ御逗留御下向ノ路次スカラ。事故

此條ハ式部
 卷二
 三

ナク。同二十九日ニ鎌倉ノ御所ニ著給フ。又テタカリケル
事トモナリ。

被評諸寺供僧付僧侶行狀

同十二月七日。評議ノ次ニ定メラル、旨アリ。關東諸寺ノ
供僧病患ニ臨メ、寺職ヲ非器ノ弟子ニ附属シ、又ハ
名代ヲ立テ役ヲ勤メ、或ハ妻子ヲ貯ヘテ墮落ノ身トナリ。
寺門ノ施入ヲ貪リテ、弟子ニ運上ラトルコトアリ。向後停
止スベシ。袈裟カケナカラ、隠シテ魚鳥ヲ喰ヒ、妻子ニ陷
入テ非分ノ罪科ヲ犯ス。条言語道斷ノ悪行ニシテ、方
ニ在家ノ業因ニ過タリ、重欲強盛、頗ル世俗ニ墮、且
愚癡ナルコト庸人ニ劣レリ。國民ヲ誑カシ取テ、利養ニ
アカス。無行無學ニシテ、祖師ノ真教ニクダシ。王法ノ外護

トナルベキコト一ツモナシ。信施ノ報實ニ耻ベシ世ノ爲人
還テ政道ノ妨トナル甚タ誠ムベシ。昔佛法コノ國ニ流
ハリシヨリ。國郡ニ祈願所ヲタテ、菩提所ヲタテリテ、家々
コレヲ崇仰ス。禁裡ノ御領所、國司領郡司領官位領ニ補
セラレ、一國ノ府ニ寺ヲ置テ、國分寺ト名ク。國司、菩
提所トシテ、寺領ヲ付ラル。又一國ニ惣社アリ、神護寺ト
号ス。國司ノ祈願所トシテ、社領ヲ付ラル。寺僧等ハ、學行
怠リナク、戒行法門ヲ説テ、人ノ惡ヲイサシメ、善ラスム。僧
侶ニ威ヲケレハ、民俗ソノ説誠ヲオモセシス。此故ニ國司ハ
頭ヲ傾ケテ敬屈ストイヘトモ、戒行道德ノ沙門、コレヲモ
喜コヒス。不惜身命ノ行ニ依テ、國司ノ惡行ヲ諫メ、我身
命ヲ害セラレシコトヲモ恐レシ。僧ニ科ルトキ、一國人是

正クス。沙門ノ教誠神職ノ諫諍ニ依テ。國家ニ惡事
災難ナシ。上ハ下ヲ哀シ。下ハ上ヲ敬ウテ。忠義廉耻威
ニ行ハレテ。天下太平ナリキ。中比釈門ニ殘賊ノ毛ノ出來
リ。佛戒ヲ破リ餘法ヲ謗リ。我慢放逸無道不學ナリ。夫
大小權實ノ法門ハ化用ノ前ニ下愚ヲ教ル方便ナリ。實
ニ八法ニ二法ナシ。只沙門ノ行德智分ニ勝劣アリ。全ク法
ノ科ニ非ス。聖德太子ヨリコノカク。佛法ヲモツテ外護トシ
國ヲ治ルニ。神佛王道一躰不二ナリト教ヘ給フ。然ルコ
比ハ。イヨク。澆漓ノ世トナリテ。神佛二道ハ。ルカ。キカ
ニ衰ヘテ。社司僧侶ハ。物ノ道理ニ。ヨ。只信施ヲ取テ。榮
耀ヲ事トシ。外ヲ飾リテ。内ニ實ナシ。向後件ノ惡行ヲ。ア
ヲタメ正法ヲ。モルベシ。違犯ノ僧ハ。寺院ヲ追却シ。科ノ輕

輕

施

重ニ依テ成敗スベシトゾ。アレレケリ。

泰時被誠奇物

曆仁二年二月十日。改元有テ。延應元年ト号セラレ。同月
ニ後鳥羽院隱岐國ニシテ崩ジ給フ。聖筭六十歳トゾ。キコ
エシ。同三月ニ北條時房卒セラレ。同十月ニ三浦義村逝
去アリ。延應二年七月十六日。改元アリテ。仁治元年ト号
セラレ。二月十八日。右京權大夫泰時仰せ出サル。ヤウ。関
東ノ御家人并ニ鎌倉伺公ノトモカラ。近年奇物ヲ。詭ヒ
過差ヲ好シ給フ。コレ甚ハタ。然ルベカラズ。儉約ヲ守リ給フ
ギ。金。條々ノ沙汰アリ。若違背ノ輩ハ見及ブ。隨ガヒ
法ニ任セテ。オコナハルベシト。堅ク禁制セラレケリ。コレ泰時
公世ノ費人ノ勞ヲ深ク悲シニテ。理政安民ノ事ヲノ

三常ニ思ヒ給フヨリ外ハ又佗事ナシ。若ハ諸國參觀ノ大名小名或ハ珍多キ雜具新渡ノ唐物等ヲイラスルコトアレバ大ニ氣色ヲ奮テ各々フニ此代物ハ定メテ莫太ニゾ候ラシゴレラノ具ニ産テ德ラソナエタルニテモ候ニタバ類不ク珍ラキ故ニソ。泰時ニ給ハリヌラシ御心ササホハ感ジ候ヲヘトモ。コレ更ニ撫民國政ノ用ニ立ニ別ニ詮ナキモノニ候。カハル無用ノ具ヲ買求メテ國財ヲ盡サレハ口惜キ御計ヒニヤ。此代物ヲ出シ給ハニ領地ノ百姓ニ賦歛ヲオセクニテ取集メ給ヒヌラシ。又御自分モ財キテ貧匱ニナリ各々ハ自然國亂レシ時。遠國在陣ノ賄即從ノ扶助ニ何ヲカ致シ給ハニヌコナル覺束ナク候トテ其代物ヲワキテ出サレシカハ奇物ヲ奉ルコトハ止ニケ

リ。又頭人評定衆モ諸大名ノ土産ヲウケテハソレヨリ倍返シテ返礼セラルベシト仰せ出サレタリ。遠國ヨリ在鎌倉ニ各々ハニハサコソ世財モ匱ニクオハスラ。近國ニ所領ヲモチナガラ扶助コソナカラメ。對サヘ遠國ノ軍ニ財物ヲウケ給ハニコトハ法ニ背キ義ニ違ヒ候ト耻ニヌラシカハ土産ノ事ハ止ニケリ。諸將諸侍自然ニ侈ヲ省キ過差ヲメ風儀物コトニシニヤカニソナリニケレ

仁治二年二月四日戌ノ刻ハカリニ赤白ノ氣ニ條西方ノ天際ニ現ジヤウヤク消テ後ニ赤氣ノ一道ソノ長七尺バカリニエテ耀ケリ。陰陽師泰貞朝臣御所ニ參ヒテ申ケル此天變ヲ彗形ノ氣ト名ツク俗説ニ火柱ト申サラス

火柱相論付泰時詠歌并境目論批判

昔村上天皇ノ御宇。康保年中ニ出現セシコト。舊記ニ載
ラレ候ト申ス。晴賢廣資等ノイリテ。今夜ハ空陰リ。雲ウ
ズ。星ノ形勢分明ナラス。此赤氣ニ軸星ナク候ト申
スニ依テ。一決ニ推キ所ニ同七日ノ巳ノ刻ニ大地震アリ
去ヌル建曆年中ニコレホトノ地震アリ。和田左衛門尉義
盛カ叛逆ノ兆ナリキ。御慎ミアルベシト。古老ノ輩ハ申合
レケリ。同十六日。天文道ノ輩ニ仰セテ。去ヌル四日ノ天變
ノ勘文ヲ奉ラシメラル。恭貞カ書ニハ陰雲ニ依テ分明ナラ
ス。但ニ天變ニ處セラレハ火柱ノ形勢ナリト申ス。晴賢カ
狀ニハ推古天皇二十八年。天慶二年。元永五年ノ赤氣
今是同ジト申ス。相論ツ井ニ決セス。將軍家ノ仰セニ天變ニ
極リナハ。京都ヨリ申來ルベシ。其時御沙汰アルヘキコトニ

テ。此義ハ相論ヲ止メ給フ。同二十日ニ一條殿ヨリ御書到
來シテ。去ヌル四日ノ赤氣ノコト。彗星出現ノ由風聞アリ
ト仰セ下サル。恭貞晴賢カ勘文ヲ調ヘテ。京都ニ進セラレ。御
沙汰ヲソ經ラレケル。同二月十六日。右京權大夫恭時。評
定所退出ノ時。庭上ノ落花ヲ見テ。カクゾヨミ給ヒケル
事。滋キ世ノ習ヒコソ物ウケレ。花ノチリナク春モミラレス
人ノ承リテ感ズナカラ。心ニカ。リテ存ストナリ。同三月
二十五日。海野左衛門尉幸氏ト。武田伊豆入道光蓮ト
相論ノ事アリ。上野國三原莊信州長倉保トノ境目争フ
ニ海野カ申ス所。其謂アルニ依テ。貞永式目ノ法ニ任セ。押
領分ヲ差加ヘテ返シ。沙汰スベキコト。伊豆前司賴定。布施
左衛門尉康高ニ仰セ含マラル。光蓮恨ヲ含ヒテ。一族ヲモ

友達ヲ語ラヒ。右京権大夫恭時ヲ討テ宿意ヲ遂
ニト謀ルヨリ風聞ス。恭時聞給ヒ人々ニ向ヒテ歎ク。人々
久ノ恨ミヲ顧ミテ其理非ラ分ズ。公政道ノ本意有ヘカニス。
逆心アラニコトヲ恐レテ子細ヲ申オオキハ定メテ又私ヲ
存スルノ謗ヲ招カシモノカ。去ヌル建曆年中ニ和田左衛門
尉義盛謀反ヲ企テ比囚人平太胤長ヲ免レ給ハルベキ
トヲ稱ス。一族ヲトクク列泰セムトイハモ許容セラレス
トサヘ平太ヲ面縛シテ彼等カ眼前ヲ引渡シテ人ニ預ケ
ラレシカバ義盛憤ヲリテ一族蜂ノケトクニ起ルトイハ共當座
ニヒテハ敢テ私ヲ存セサル先蹤ス。テカタクトニ是政道
ニ私ナキコトヲアハス所ナリ。往昔右大將頼朝公ノ御時
上總介廣常ハ最初ニオホク忠節ヲツタシケレトモ平家追

討ノタメ西國へ軍兵ヲ差上セラレシ時ニ廣常驕ヲ極メ謂
レザル所オホク先忠ヲノミ申立テ恨ムニキコトヲタラシ
心ニハ隱謀ナクシテ隱謀アルニ似タリケレハ當時追討ノ障
トナルヲモツテ廣常ヲ御所ニ召テ侍ニ仰セテ刺殺シ各ヒ
ケリ。サシモ以前ニ忠アリシモノヲカク罪ニ給フコソ無慚ナ
レ此君頼モシカラスト傾アキ申セシカトモ。此事ニヨリテ諸
將邪義ノ所へ忽チ留マリス。忠ハ重ク賞ニ寄ハ輕ク行ハ
ヘトハイヒナカラ。時ニタカヒテ罰ヲオモク行ハサレハ道義
塞カルコトアリ。主君ノ御恩ヲ傍タニナシ我カ忠ヲノミ覺ニ
テ無礼緩怠ノ所ヘテイタサハコレヲ罰シテ一跡ヲ追捕
シ忠義ヲ嗜ム人ニ分チ遣サハ所ハ自然ニ止ヘレト仰セア
リ。光蓮此ヲ傳ヘ聞テ理ニ服シ後悔ヲ懷キ起請文ヲ

書進^{カキ}。一心ナキ由ヲソ陳謝^{チンゲ}ニケル。

北條恭時^{セイキョウキョウジ}逝去^{セイヤク}。有^{アリ}左近大夫^{サキンダイフ}經時^{キョウジ}執權^{シツケン}。

同六月下旬。右京大夫^{ウキョウダイフ}恭時^{キョウジ}不例^{フレイ}ノ氣^キヲ^シス。將軍家ヲ初^{ハジメ}奉^{ホウ}リ。嫡孫^{チツソン}左近大夫^{サキンダイフ}將監經時^{シヤウカンキョウジ}以下^{以下}。一門ノ輩^{ハハ}ハ^ハイ^イフ^フニ及^キハス。勤仕^{キンジ}ノ大名^{ナミン}小名^{コナ}ニ^ニイ^イタル^{タル}。テ汗^{アセ}ヲ握^{ニギ}リ息^{イキ}ヲ吞^{ノド}テ諸寺^{シヨウジ}ノ祈禱^{キタウ}諸社^{シヨウシャ}ノ立願^{リツクワン}醫師^{イシヤ}陰陽師^{インヤウシ}八殿中^{ハツテンチュウ}ニ伺^{ウカガ}公^{キミ}ニテ百計^{ヒャクケイ}スレドモ効^{キコ}ヲ奏^{ソウ}セス。ソ并^{ナヒ}ニ限^リリテ。エ給^{タマ}ハス。同十五日^{ドウジツ}ニ事^{コト}切^{キレ}サセ給^{タマ}ヒケリ。惜^{オシ}ムヘシ歎^{ナガ}ク。末世^{マクシ}ニ^ニタ^タク^クヒ^ヒナ^ナキ^キ賢者^{ケンシャ}ト^トシテ。國家^{クニカ}ノ棟梁^{トウリヤウ}政務^{セイム}ノ龜鏡^{キケイ}ソノ仁惠^{ニヱ}ハ^ハ七^{シチ}岳^{ガク}ク^ク四海^{サイカイ}ニ蒙^{カモ}リソノ廉讓^{レンニヤウ}ハ^ハア^ア子^コク^ク一^{イチ}天^{テン}ニ^ニ歩^フリ^リテ。德^{トク}ヲ才^{サイ}サメ道^{ミチ}ヲ才^{サイ}コ^コト^トヒ靡^ヒカヌ草木^{ソウボク}モ^モ大^{ダイ}カ^カリケル^{ケル}。天年^{テンネン}ノ極^{キョク}ナル所^{トコロ}六十二^{ロクニジュウニ}歳^{サイ}ノ春秋^{シュウシュウ}忽^{トク}チ^チニ^ニ草頭^{ソウトウ}ノ露^ロト^ト共^ニ落^{オチ}テ。風前^{フウゼン}ノ燈^{トウ}ト^ト同^{ドウ}ト^トシ

後記

ク消^{クシユ}給^{タマ}フコソ悲^{カナシ}ニケレ。去年^{クワンニ}ハ相摸守時房^{サウモシヨウボウ}卒去^{ソウキョ}アリ。今年^{コトウシ}ハ又^{マタ}恭時^{キョウジ}逝去^{セイヤク}アリケレバ。古^コ老^{ラウ}ノ名臣^{ナミン}ヤ^ヤタ^タク^ク絶^{ツク}テ。天下^{テンカ}ノ政道^{セイダウ}故實^{コジツ}ヲ失^{ウシ}チ^チニ似^ニタルモノカ。貴賤^{キケン}多少^{トウシヤウ}ノ救^{クウ}テ老若^{ラウニヤウ}遠近^{エンキン}ノ愁^{ウレシ}。此^{ココ}時^{トキ}電光^{デンクワウ}ノ影^{カゲ}ヲカ^カニ^ニチ^チ石火^{シツカ}ノ飛^{トビ}ヲ根^ネ山^{サン}ノ内^{ウチ}粟舟^{ムスフネ}ノ御堂^{ミツドウ}ノ傍^{ナハタ}ヲ^ヲニ^ニ墓^{ハカ}リ奉^{ホウ}リ。諸將^{シヨウシヤウ}挽歌^{バンカ}ヲ誦^{ソウ}ヒ衆僧^{シュウシヨウ}經咒^{キョウジュ}ヲ唱^{ナゲ}フ。法名^{ホウメイ}ヲ^ヲハ^ハ歡^{カン}阿^アト^トソ^ソ号^{ガウ}ニケル。此^{ココ}春^{ハル}ヨ^ヨニ^ニ給^{タマ}ヒシ花^{ハナ}ノ千^チリナ^ナトイ^イフ歌^{ウタ}ハ^ハ兼^{ケン}テ。コレヲヤ思^{オモ}召^メヌラント。殿中^{テンチュウ}鎌倉^{カムクラ}近國^{キンクニ}ニ^ニテ^テモ^モ物^{モノ}ノ音^ネヲモ鳴^{ナゲ}サス。野毛^{ノモウ}山^{サン}モ^モサ^サビ^ビカ^カヘリタル^{タル}。リ^リサ^サナ^ナリ。中陰^{チュウイン}ノ御弔^{ミツナリ}ニ^ニ結縁^{ケツエン}衆^{シュウ}請^{ケイ}ノ輩^{ハハ}墓^{ハカ}地^チノヤ^ヤタ^タリ。ハ晝夜^{シユヤ}ノ境^{サカイ}モ^モナ^ナク。人^{ヒト}ノ立^タ止^{トメ}時^{トキ}ハ^ハナ^ナレ^レト^トハ^ハニ^ニ御^ミ在^ア生^ナノ内^{ウチ}邪^{ジャ}ヲ^ヲナ^ナク^ク恩^{オン}ヲ^ヲ施^セシ給^{タマ}ヒケル。名^ナ殘^{ザン}ト^トゾ^ゾ覺^{オホ}ユル。仁治^{ニヂ}四年^{ニヤウ}二月^{ニゲツ}廿六日^{ニジュウロクニチ}改元^{カイゲン}アリテ。寛元^{カンゲン}ト^ト号^{ガウ}セラル。同六月^{ドウリク}十五日^{ニジュウニチ}恭

502

時聖^ニ周^ニ関^スノ御佛事ヲ粟舟ノ御堂ニシテ^行リ^オ五
ナル左近大夫將監經時。舍弟左近將監時頼以下ノ一族
殘ラス奉詣アリ。曼荼羅供ノ法會導師ハ大阿闍梨信濃
法印道禪讀衆十二口。此供養ハ幽儀御在生ノ時。子トニ信
心ヲ疑^ヒテ給フサコソハ今モ受^テ悦^ビ給フラニト。殊勝ナル中ニモ
昔^ステ^ハ涙ノ雨^ノイッ^レノ袖モ沾^レニケリ。左近大夫經時先
ニ^ハカ^ハラス執權ヲ勤ムヘキヨ^ク將軍家子トニ仰セ^イタサレ
諸事ノ政務前右京兆ノ式目ヲ守^レケル。同七月八日
北條左近大夫經時ヲ武藏守ニ任^ジ。時房ノ四男朝直ヲ
遠江守ニ任^セラル。

將軍家入御佐渡前司亭

同九月五日。將軍家佐渡前司基綱カ大倉ノ亭ニ入御

給フ武藏守經時。左近將監時頼。遠江守朝直以下ノ輩
供奉^シ奉ル。和歌ノ詠トリ^ク秀逸ノ句ヲ出^シ詞ハ^亦キ
ヲ用^ヒナカラ意ハ新^シキ歌トモナリ。次ニ管絃ヲ初メラシ
將軍家ハ御笛ヲ^ハサレ能登前司ハ琵琶ヲ仕^リ一條中
將和琴ヲ引給^ヒ壬生侍從唱歌セラル。笙瑟ノ調音^ハサエ
テ秋風樂ヲ奏スレバ折ニ叶ヘル秋ノ風ニ木ノ葉モツレテ舞
ガ^コト^シ万秋樂ノ声ノ内ニ六千世ヲ重ヌル壽ヲ君ガタメニ
ト歌フナリ。世ハ治^レレル太平樂四海ノ外ニテナクナル納
蘇利ヤ羅陵王メ^クル盃カスソフ。胡飲酒酒胡子廻盃樂
ヤコトニ妙ナル音樂ニ陸ニハ馬モ秣ニ仰^キ水ニハ魚ノ踊^ス
素ヨリ此所ハ閑寂山陰ノ幽栖ナリ古松枝タレテ六千年
ノ色ヲ^モ世老^ハ槐葉茂ク^レテ万世ノ徳ヲ^アス^ハス。端山ノ

モミチ籬ノ菊露オモケナル萩カ枝モ枯タル後ゾオモ
キ岩ヲタシメル中ヨリモ静カニ落ル龍ノ絲タル人コトニカ
メテハ心ヲツナキテ止ムラニスデニ暮カ、リケレバ白拍子兩
三人アイリテ今様朗詠シ雪ノ袖ヲ返シケリ猿樂ヲ
キテ舞跳セサシノ御遊ニ將軍家奥ヲ催サレ雞鳴ニ
及ヒテ還御アリ基綱大ニ喜ビテサシノ御送り物ヲ
ゾ奉ラレケル。

將軍賴經公讓職位

同二年三月將軍家鎌倉中ノ堂舎佛閣巡礼シ給フ思召
立コトノ才ハシラスラモツテナリ。去年ヨリ打ツキ天變地
妖サシクナリ。子下サテ極月二十九日ニ白虹アリテ天涯
三日リ日ヲ貫キテ時ヲツクス彗星客星隙ナク出テ風雨

更ニ時ニ叶ハス諸寺諸社ニ仰セテ修法祈禱ノ絶ル間ナシ
諸國ノ訥ヘ非法ノ犯科御心ヲ憐ミ給フナニハツケテ浮
世ノ中鬼ニモ角ニモ厭果サセ給ヒテイカニモシテ遁ハヤ
トソ思ヒ立給ヒケル。レカノニナラス御病氣折々差起リ
テ合期ニ堪給ハス數輩訥訟ノ事モ弃捐セラレ庭中ニ言
上スルモノ決断ノ遲キスルコトヲ歎キ奉ル武藏守經時モ
病氣常ニ絶サルヲモツテ攝津前司佐渡前司信濃民部
大夫入道等ニ任セラル彼トイヒ是トイヒ政務ニ懈怠アリ
ハ京都鎌倉諸人ノ口モウルサク思召ケレバ將軍賴經公
御若君イセダ六歳ニナラセ給フ。同四月二十一日御元
服コトアリテ賴嗣トゾ号シケル。京都ニ奏聞シテ征夷
大將軍ノ職ヲ讓ラレ同七月五日大納言賴經公ハ久遠

壽量院ニテ御飭才ロシテ法名行智トソ申ケル年來ノ御素懐ナリトテ今ハ御喜ヒマシクケリ年改マリテ春ニモ成テハ京都ニ御上洛アリテ六波羅邊ニ御坐アルベシトテ兼テヨリ御所ヲ造置世給フ同九月十二日諸事ノ奉行等悉ク定メラレタリ同廿八日二三條扃卒去セラル此尼ハ女性ナカレモ才智深く御所ノ内外ニツケテ故實ヲ存ジ何レニモ知サル道ハナカリシ六十二歳ノ秋ノ風ニ葉ノ命落ケレハ諸人コレヲ聞傳ヘ惜ニス者ハナカリケリ同十二月廿六日北條武藏守經時ノ亭ヨリ火出テ舍第左近將監時頼ノ第失火シ餘焰飛行シテ政所焼失スサレドモ記録等ハ取出シヌ不日ニ作り立ヘシトテ番匠大勢メレ集メテ土木ノ功ヲゾ急ガレケル

鎌倉北條九代記卷第...

...

